

あんげろす

竹中時雄の滑稽

篠崎美生子

田山花袋「蒲団」(1907)の主人公竹中時雄は、19世紀の西欧文学を愛読する中年作家である。弟子の女学生にはツルゲーネフを教え、彼女に惑溺してしまったわが身をハウプトマン「寂しき人」になぞらえる。ところがこの人物は、こうして間接的にキリスト教的思考の枠組みを身につけつつも、いざその弟子が同志社の学生を恋人にするや、彼の「基督教に養われた、いやに取澄ました、年に似合わぬ老成な、厭な不愉快な態度」を攻撃せざるにいられないのだ。

日本の近代にとって、キリスト教は決して他者ではない。受洗しなくとも、聖書を読まなくとも、西洋由来の概念をインプットしている近代人がキリスト教的思考と無縁でないことは、先日亡くなった柳父章氏の『翻訳語成立事情』を一読すれば明らかだと思うのだが……。

「へえ、ク、クリスチャンなんですか？」警戒心いっばいに後ずさる人に、ほんとうは言ってやりたい。君も竹中時雄かい。ほんとは君も私と同じ穴の貉なんだよ、と。



トニ・モリスンの足跡を辿る旅

(ご挨拶に代えて)

森 あおい

本年度より明治学院大学キリスト教研究所の所員にお迎えいただきましたことを心から感謝申し上げます。所員1年目という記念すべき年が、特別研究休暇の年と重なっており、研究所の活動にまったく参加できずに申し訳なく思っていたところ、『あんげろす』77号への寄稿の機会を頂きました。実際に所員の方々にお目にかかるチャンスはなかなかありませんが、この紙面をお借りしてご挨拶と自己紹介をさせていただきたいと思います。

私が明治学院大学に着任したのは、2012年4月のことで、早いものでそれから7年が経とうとしています。授業は、国際学部国際学科の演習、異文化コミュニケーション、アメリカ文学概論、国際キャリア学科の Intercultural Communication 等を担当しています。専門はアメリカ文学で、特にアフリカ系アメリカ人女性作家トニ・モリスンについて、人種やジェンダー、階級等の視点から研究しています。

キリスト教と私の関わりは、昨年召天した母が独身時代に日本福音ルーテル鹿児島教会で受洗したことに端を発しています。その後、母は父と出会って結婚し、私が生まれてから父も洗礼を受けたので、私はクリスチャン・ファミリーで育ちました。日曜日になれば両親とともに教会に行っていたのですが、幼い頃の教会での思い出と言えば、牧師先生のお話よりも、当時、鹿児島教会に派遣されていたアメリカ人宣教師の子どもたちと言語の違いの壁を乗り越えて(当時は幼すぎて、その差もあまり理解できていなかったと思いますが)、一緒に英語の歌を歌ったり、英語の聖書物語の絵本を見たりしていたことです。このような環境で幼少期を過ごし、また父もアメリカ文学の研究者だったことから、私の暮らしには、キリスト教やアメリカ文化が非常に身近なもの、ある意味、当然のものとして存在していました。成人したことをきっかけに堅信礼を受けました

が、求道者としての主体的な活動をしているとは言い難いところです。しかし、これまでの人生を振り返ってみると、ミッション系の東京女子大学に進学してアメリカ文学を専攻し、卒業後に進んだニューヨーク州立大学バッファロー校大学院でトニ・モリスンの作品と出会い、今、こうして明治学院大学に奉職していることも、無意識ながらも「明日のことを思い煩うな」という聖句に従って生きてきた必然の結果のように思えます。

私の研究対象であるトニ・モリスンは、1993年にアフリカ系アメリカ人女性として初めてノーベル文学賞に輝き、人種や性差の壁に阻まれて社会の主流から排除されてきた人々を、文学や文化の力を通して解放しようと試みています。モリスンもクリスチャン・ファミリーで育っており、父は教会の役員を務め、母は聖歌隊のメンバーとして活躍していたそうです。彼女の作品でもキリスト教についての言及が見られ、『パラダイス』(Paradise 1998)では、黒人だけのコミュニティを舞台にキリスト教と権力の問題が描かれています。あいにく、モリスンの作品について詳しく論じるスペースはここではありませんが、今年の夏、研究調査のために、モリスンの生まれ故郷オハイオ州を訪れ、彼女の足跡を辿る機会を得たので、その旅のご報告を通してモリスンの世界を少しでもご紹介できればと考えています。

モリスンは、1931年にオハイオ州の小さな工業都市ロレインで生まれました。ロレインは地理的には中西部に位置し、北は海のように広大なエリー湖をはさんでカナダと接しています。(写真 1)。

写真 1



ロレイン側からのエリー湖の眺め。湖の対岸はカナダ。

アメリカの奴隷制時代には、その制度に搾取され抑圧されていた奴隷にとってカナダは、自由と希望の土地を意味していました。奴隷制から逃れるために命がけで南部のプランテーションから脱出した人々は、オハイオ州を經由してカナダをめざしました。このような奴隷の逃亡を組織的に援助する地下鉄道¹のアメリカの終着駅が、モリスンの生まれ故郷ロレインの近隣には点在していました。

中でもロレイン近郊の町、オバリンの町のいたるところに地下鉄道や奴隷制廃止運動に関する史跡が残っています。²(写真 2) この町に 1833 年に創立されたオバリン大学は、開学当初から黒人の入学を認め、またアメリカで初めて男女共学になったリベラルな大学として知られています。モリスンは、オバリン大学について、「人種の調和の源」と描写し、彼女の人種意識にも大きな影響を与えたと述べています。

写真 2



地下鉄道の歴史を記憶するために、オバリン大学の学生カメロン・アームストロングによって 1977 年に創られた線路のモニュメント。逃亡奴隷が、自由を求めて地下鉄道を経て地上に上がってきたことを象徴的に表している。

¹地下鉄道とは、逃亡奴隷を援助する秘密組織。奴隷制廃止運動を推進する北部の白人や自由黒人がメンバーとなり、奴隷の逃亡を助けた。逃亡奴隷を「乗客」、彼らを導く案内人を「車掌」、身を隠すところを「駅」と呼び、逃亡奴隷は、北へ北へと進んだ。

² オバリンのヘリテージ・センターでは、町の奴隷制にまつわる史跡に関して、地図や写真とともにわかりやすく解説したパワーポイント資料を搭載した iPad を希望者に貸し出している。詳細は以下のサイトを参照のこと。
<<https://www.oberlinheritagecenter.org/visit/tablet-tours>>

現在、オバリン大学にはトニ・モリスン学会の事務局が置かれており、2009 年にはモリスン学会とオバリン大学の共催で、オバリンの地下鉄道の歴史を記念する碑文が刻まれたベンチの除幕式が、モリスンを招いてオバリン大学に隣接するタッパン広場の一角で行われました。オバリン大学も、モリスンを大学の奴隷制廃止運動の歴史に連なる重要な作家として位置付けていることが窺えます。

いわばコミュニティ全体が団結して奴隷制廃止運動に関わった歴史を持つ地域で育ったモリスンは、幼少時代に南部のような暴力的な人種差別を経験することはなかったと回想しています。ロレインの産業の中心は鉄鋼で、人種や国籍も含めて様々なバックグラウンドを持つ人々が製鉄所で労働者として働いていました。従ってロレインでは、資本家と労働者の階級差のほうが、人種の違いよりも深刻な問題だったとモリスンは述べています。実際、モリスンの生家も、様々な人種の労働者階級の人々が共存する地域にありました。また、学校でも人種の違いに関係なく子どもたちが同じ教室で机を並べて学んでいたと言います。

しかし、だからと言ってロレインに人種差別がなかったわけではありませんでした。たとえば、モリスンの第一作『青い眼がほしい』(*The Bluest Eye* 1970) は、1930 年代のロレインをモデルとした町を舞台に展開されますが、ダウンタウンにある映画館は人種隔離されていたことが示唆されています。また、主人公ピコーラの母がメイドとして働く白人の家は、エリー湖湖畔に位置する瀟洒な邸宅として描かれていますが、その家は白人専用の居住区にありました。今ではそのようにあからさまな人種差別はありませんが、湖の美しい景色に溶け込むヨットハーバーの一角にあるレストランで食事をしているのはいまだに白人のみで人種隔離政策の名残を垣間見た思いがしました。

もちろん、モリスンはロレインの町が誇る作家です。ロレインの歴史協会には、地元紙 (*The Morning Journal*) に掲載されたものを中心に彼女の活躍を報じる記事が、作家デビューを果たした 1970 年代以降現代に至るまで年代順に整理され、丁寧に保管されていました。(写真 3)

またロレイン公立図書館にはトニ・モリスン・リーディング・ルームが設けられ、ノーベル文学賞受賞式で撮影されたモリスンの写真や記念の品々、モリスンの研究書等が展示されていました。(写真 4) さらに、2009 年にはロレインにモリスンの名を冠した公立のトニ・モリスン小学校 (Toni Morrison Elementary School) が設立されました。成績表から卒業証書、そして体操服に至るまで彼女の名前が記されている小学校に、叶うのであれば私も通いたいです。

モリスンは、今年 87 歳になり、車椅子での生活を送っており、身体的には不自由な暮らしを余儀なくされていますが、創作意欲は一向に衰えることなく、最近ではエッセイ集『他者の起源』(*The Origin of Others* 2017) を出版し、今はまた新作の執筆に取り組んでいるそうです。私は、早くも定年後の隠居生活に思いを馳せてしまうのですが、精力的に創作活動に取り組むモリスンを見習って、これからも教育・研究、そして新たにキリスト教研究所の活動にも励んでいきたいと思っています。所員の皆様にも叱咤激励していただければ幸いです。どうぞよろしく願いいたします。

写真 3



ロレイン歴史協会の建物。かつては、ロレイン公立図書館として使われており、モリスンは、高校生時代にこの図書館で司書のアシスタントとして働きながら、あき時間には色々な書物を読んだと言う。

写真 4



ロレイン公立図書館のトニ・モリスン・リーディングルームの展示。

もり・あおい (所員)

中国における賀川豊彦を追跡する

—「宋美齡のラジオ放送」伝説をめぐって— (上)

金丸 裕一

(一)

明治学院大学キリスト教研究所の協力研究員として迎え入れていただいた直後の 2018 年夏から、台北・中央研究院近代史研究所に身を寄せて、日中キリスト教関係史をとりまく歴史的素材を眺めています。これを機に、多くの巷説の中でも特に気になっていた問題を調べて見ました。具体的には、①1939 年 12 月に賀川豊彦がいるので日本の滅亡を祈れない旨を重慶から宋美齡が「ラジオ放送」した件³、②これが夫君の蒋介石にも伝わり敗戦日本に対する「以德報怨」政策という寛大な結果を生んだという⁴、非常に「感動的」な逸話の実相についてです。ここで簡単に中間報告

³ 黒田四郎『私の賀川豊彦研究』(キリスト新聞社、1984 年) 10~11 頁。

⁴ 加藤正義『日本を今日あらしめた蒋介石総統の恩情』(伝道トラクト、刊行年等不明)。類似した言説は随所で見られたが、「以德報恩」政策とは本質的に、1940 年代の激変した極東情勢の中で辿り着いた戦略的妥協点であった(黄自進『蒋介石と日本—友と敵のはざままで』武田ランダムハウスジャパン、2011 年)。

を行い、各位からのご批判を仰ぎたいと願います。

近代中国の政要には意外とクリスチャンが多く、他方で1920年代の反欧米気運にともない非キリスト教運動も高揚していました。こうしたなか、欧米からヤング・チャイナのストロング・マンと目されていた蒋介石は、宋美齡と結婚した後の1930年10月23日に、メソジスト教会の江長川牧師から受洗します。権力掌握後の二人の日常については、一日ごとに極めて詳細な実録が作成・保管されており、エピソード検証も楽だろうと予測していました。

蒋介石については、例えば秦孝儀編『總統蔣公大事長編初稿』13冊（中正文教基金会、1978年～2008年）、呂芳上編『蔣中正先生年譜長編』12冊（国史館、2014年）、王正華など編『蔣中正總統檔案 事略稿本』82冊（国史館、2003年～2013年）、黄自進編『蔣中正先生對日言論選集』（中正文教基金会、2004年）、黄自進・潘光哲編『蔣中正總統五記』5冊（国史館、2012年）はじめ膨大な記録が閲覧できます。宋美齡の場合も多く英語による著作の他、国民出版社編『蔣夫人言論集』（重慶：国民出版社、1939年）、青年文協社編『蔣夫人訪美言論集』（福建：中国文化服務、1944年）等、日本占領地を避けて発行された著作集、あるいは近年の中国・台湾の合作による成果というべき張憲文・武菁主編『宋美齡文集』5冊（台北：蒼壁出版、2015年）もあり、文献的実証は難なく遂行できるように思われました。

では、現在までの網羅的な調査結果はどうでしょうか。史料群には宋美齡によるラジオ放送の原稿も幾つか収録されていますが、全ての基調は当然ながら、厳しい日本批判と徹底抗戦の奨励です。また、「蒋介石に頼まれて協同組合運動を指導した」と豪語する賀川豊彦ですが、前出の蒋介石諸文書において徳富蘇峰や松岡洋右など随所に登場する日本人の中に、遂にその名は発見できません。これはいつたい、何を意味しているのでしょうか？

(二)

宋美齡による賀川評価については、実は大きなカラクリがありました。黒田牧師が回想した内容は、そもそもニュ

ーヨークで発行されていた *Forum and Century* という雑誌の1934年3月号に掲載された、“What religion means to me” と重なります。満洲事変から満洲国建国に重なる時期の史料です。まだ、停戦や和平の可能性が模索された時代に生まれたものです。内憂外患の国難に在った蒋介石や宋美齡ですが、「意気消沈や絶望といった感情は持たず」、「神は… …全ての事を成し遂げる能力を持つ」と語る信仰告白であり、次の感動的叙述が印象に刻まれます。

And today I can pray for the Japanese people, knowing that there must be many, who, like Kagawa, suffer because of what their country is doing to China.

賀川研究者の間では良く知られた、正にあの部分ですが、証詞じたいは英語圏向けのメッセージであり、更に言えば、Eleanor Roosevelt (1932年12月号) や Mary Pickford (1933年8月号) など、世界的なファーストレディーや著名女性による同名の連載に、宋美齡も招かれた結果の産物だと思われれます。日中戦争が激化した時代になっても、May-Ling Soong Chiang, *This is Our China*, Harper & Brother Publishers, 1940. などは、これを戦前と同じ文章で再録しており、かなり世界に広がったことでしょう。

ところが一転して、中国語版の状況はなかなか複雑でした。訳文には幾つかの種類があり、掲載された雑誌や書籍によって、パターンも微妙に異なります。管見の限り最初に公刊された中国語訳は、(a) 星野訳「宋美齡女士之宗教意義談」（『中央時事週報』3-13、1934年4月7日）でした。南京・中央日報社という御用新聞から発行された雑誌ですが、この抄訳で賀川豊彦の部分は省略されていました。

他方、(b) 蔣宋美齡著・慕潔訳「宗教對於我的意義」（『同工』131、1934年4月15日）以降、(c) 「我的宗教經驗」（『華興週刊』31-25、1934年7月4日）、(d) 宋美齡女士原著・記者訳述「我的宗教經驗譚」（『明燈』207、1934年7月?日）、(e) 蔣宋美齡著・慕潔訳「宗教對於我的意義」（『佈道雜誌』7-4、1934年7月?日。なおこれは(b)の転載）、(f) 宋美齡

女士原著・明燈記者訳述『我的宗教經驗譚』（広学会、1934年7月?日。これは(d)を直ちに単行本として出版したもの）、(g)宋美齡「我的宗教」（『真光』33-8、1934年8月?日）、日中戦争勃発直前においても、(h)宋美齡女士原著・明燈記者訳述「我的宗教經驗譚」（『聖公会報』1、1937年1月1日。これも(d)を転載）など、キリスト教系出版物においては、英文版と同じように賀川豊彦の名が登場します。まさに、1920年代から中国キリスト教界で高まったその榮譽の賜物といえるでしょう。

では、官側のメディアはどうでしょうか？ 唯一の例外として、(i)指導長原著・明燈記者訳述「我的宗教經驗談」（『婦女新生活月刊』5、1937年5月?日）は(d)を転載しますが、これは新生活運動関連の刊行物でした。先に見た(a)『中央時事週報』、そして戦時下に出版され、後の宋美齡著作の底本となる「我的宗教觀」（『蔣夫人言論集』国民出版社、1939年2月）といった「官製」翻訳において賀川云々の部分は削られていました。恐らくは何らかの判断が働いた結果、国内対象の政治性を帯びたテキストにおいて「消された」のではないのでしょうか。

このように推理を重ねると、読者諸賢は次のような理路に辿り着くと想像します。すなわち、満洲事変から中国東北部の植民地化過程においては、日中停戦協定など状況の流動性とも相俟って、日本の「良心」を表象する賀川豊彦に対する高い評価はなお継続した。しかし実質的全面戦争が発動された1937年7月以降、「良心」に対する盤石の信頼にも揺らぎが発生、遂に官製の公式見解から抹殺されるようになった、と。（次号へつづく）

かねまる・ゆういち（協力研究員）



「分かち合い」についてわからないコト。

勝俣 誠

何を分かち合うのか

いくつになっても、わからないコトだらけだと時々気づかされます。たとえば、小さいころから、学校や教会などで聞かされてきた「分かち合い」です。

「分かち合う」というコトバがまたこの頃よくメディアに登場します。英語で「シェアリングエコノミー」などと、使わないときの自家用車を使って顧客を運ぶビジネスがよく話題になっています。ついこの間、「分かち合う」というコトバを聞いたのは、南太平洋のフランスの植民地ニューカレドニアに行った時、地元のフランス人がクルーズに呼んでくれた時でした。他の友達も合流しますとボートのオーナーに言われ、近海を一周するだけと思ったら、合流してきた彼の友人たちが大きなアイスボックスを船に乗せました。やがて、無人島に着くとこのボックスを大騒ぎして降ろし、結局、海でとれた魚をおかずにしたピクニックだということがわかりました。ボックスの中には食器、飲み物、ご飯など全員分がしっかり詰まっていました。何も食べ物を持ち寄らなかつたわたくしがすいませんと言ったら、皆から「いいですよ。あるものを分かち合う (partage) ことが大切。」といった返事が返ってきました。

「分かち合う」というコトバが今日ある快い響きがある背景には、なんでも市場競争で、自分のスキルアップで精一杯の社会の支配的規範にやや戸惑いを感じ、もう少し他者とゆっくりと接したいという願望があるのかもしれない。

だが、この分かち合いとは、何を、どのくらい、何のために、どうやって、分かち合うのかといった問いを立てて考えていくと、ますますわからなくなります。

先ほど挙げたカーシェアリングは、大手のウーバーという国際企業が有名で、車を使わないとき有効活用しようとするオーナーと、低コストで好きな時に車を利用したい需要側のニーズをマッチングして、双方から使用料をとる会

社がよく参照されます。確かに、使わないときの車を有効利用するので環境にやさしいなどと言えます。しかし、最近では、同社の配車アプリの細かいサービス規定に従わないとウーバーアプリ仕様の運転手になれないことは、結局ドライバーは自家営業者でなく、同社の指揮下で働く労働者に無限に近いのではないかという労働法からの疑問が強まっています。確かに、未使用時の車をシェアすることに違いないのですが、そこで働く人間にとっては、事故が起きても自己責任で労働条件の交渉もできず、必ずしも正当な分け前（シェア）に与られないという意味では、分かち合いの本来の意味とは遠ざかります。

では、本来の「分かち合い」とは一体何だと考えてしまいます。勿論、今も明確な答えはわたくしにはありません。

落穂ひろいは土地なし農民だった

ただ、やはり最近気づかされた分かち合いに、19世紀のフランスの画家ミレーの作品「落穂ひろい」の背景です。わたくしは、はじめ自分の畑の収穫後、刈り残った落ち穂を集める、収穫物をムダなく集める行為と思っていました。しかし、ある時、この拾っている人とは地主ではなく、農地を持たない貧農であることを知らされました。日本のウィキペディアでも紹介されていますが、これは収穫物の所有者(地主)とそれに与れない貧農との間での大地の富の分かち合い行為で、旧約聖書にも次のように登場します。

「穀物を収穫するときは、畑の隅まで刈り尽くしてはならない。収穫後の落ち穂を拾い集めてはならない。ぶどうも、摘み尽くしてはならない。ぶどう畑の落ちた実を拾い集めてはならない。これらは貧しい者や寄留者のために残しておかねばならない。」（「レビ記」19章9節から10節）

さらに気づかされたことは、早くから所有権を明文化しフランスでもいまだこの15世紀の王様の勅令(1554年11月2日勅令)に基づく落穂ひろい権 (le droit de glanage) が条件つきで法として残っているということでした。わたくしからすれば、こうした貧者向け慣習は、社会内に格差を抱えつつも、とにかくその構成員全員が生きていけるため

には、こうした収穫物分かち合いが不可欠であったことの証に見えます。また現代フランスでもこうした行為が市民運動によって行われているということも、最近見たフランス映画「顔たち、ところどころ」を写真家・アーティスト JR と共演作したアニエス・ヴァルダが2000年に「落穂ひろいの男女たち」という現代の分かち合いについてのドキュメンタリーを作っていることを知りました。(いつか研究所の皆様と鑑賞して討論できたらと思います。)

「分かち合い」についてさらなる疑問です。分かち合いに参加する、より多くを持つものと、それに預かって分けってもらうものとの関係はどんな意味を持つのでしょうか。

乞食のストライキ

かつて、わたくしが、イスラーム人口が9割以上（あくまでも宗教分類上で、クワルーンの教えをすべて日々生きているという意味ではありません）を占めるセネガルという西アフリカの大学にいたとき、同僚の間で話題になった「乞食のストライキ（原題は“La Grève des bàttu”でbàttuは土地の言葉でお布施をもらうため手にするひょうたん製の容器を持つ者という意。なお副題は“Les Déchets humains”「人間のゴミたち」となっている）」という短編小説がありました。私の記憶をたどれば、この国の都市を訪れる外国人観光客が物乞いする乞食集団に悩まされている事態を解決すべく、上昇志向のキャリア官僚が乞食をバスで人目のつかない遠地に移動させてしまうといったストーリーでした。この処置で、乞食なき市内は乞食にまともわりつかれるうつつうしさがなくなり、観光客の評判は高まります。自信を強めたこの公務員はさらなる昇進への道を探るためにイスラームの導師を訪れます。導師は羊一頭を貧者に施す善行を積み、更なる昇進が実現すると言い渡します。これで、羊を丸焼きして準備するのですが、肝心の施しの対象の乞食がもはや市内にいません。そこで彼は以前移動させた遠地の乞食部落に羊を施すのでもらってほしいと頼みますが、前回のことを忘れない乞食団のリーダーは受け取りを拒否します。結局、この役人は、バスを

チャーターして再び市内に乞食に戻ってもらうという結末です。

ここではあげるほうが偉いのか、もらうほうが偉いのかわからなくなります。換言すれば、富める者の徳とはひたすら貧者の存在によってしか実現しないのかという問いにぶつかります。

あげるのか働かすのか。

貧者との接し方をめぐり、最後にもう一つ提起させていただきます。それは西ヨーロッパ教会史の学者による新書によって気づかされた問いです(永田諒一、「宗教改革の真実」講談社新書、2004年)。

16世紀、ドイツ南部の教会でその中庭の使用権をめぐる争いが生まれます。中庭にはカトリック側が食事なども与えて保護していた浮浪者たちがいました。保護側は清貧と隣人愛から物乞い活動に寛容で、これらの人々に喜捨することは死後の救済にもつながると考え、貧しき民を招き入れたのです。しかし、おりからの宗教改革派は、「人は自らの職業をもって専念すべきである」とし、放浪乞食たちを中庭から追い出してしまいました。結局、双方は中庭の管理権を共同管理(具体的には中庭に通じる門戸の鍵の共有)で決着を見ます。

このように「分かち合い」を考えれば考えるほど素朴な疑問は尽きません。この度、大学のキリスト教研究所の協力研究員としてキリスト教にまつわるリサーチ活動に参加させていただくことになり感謝しています。

わからないコトだらけですが、ともするとすぐ役立つ働き方のみが突出する忙しい現代社会を解読するために思考の寄り道、道草、脱線を伴う哲学や信仰の切り口を研究所の皆様から示唆していただければ幸いです。

かつまた・まこと(協力研究員)



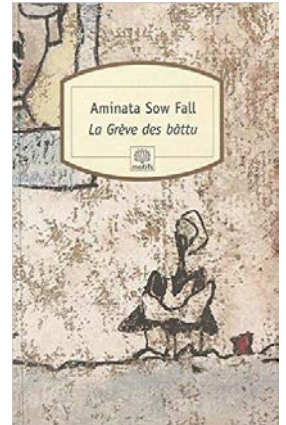
←ジャン=フランソワ・ミレー
「落穂拾い」、1857年



←落穂拾い(2000)

“Les glaneurs et la glaneuse”
監督アニエス・ヴァルダ

「乞食のストライキ」→
“La Grève des bätu”
1979年、
Nouvelles éditions africaines,



雑録

植木 献

今号も三名の方の彩り豊かなエッセイを掲載できて感謝しております。今回もそうですが、毎号あんげろすの準備をされていて感じるのは、自分の専門とは異なる分野から多くの啓発をえられるということです。しかもその啓発は、必ずしもきっちり形式の整った論文からだけではなく、むしろ半分雑談に近い、ゆるやかな形のやり取りからえられることが多いのではないかと思います。

あんげろすの存在意義もその「雑談」性にあるのではないのでしょうか。今の日本では雑談は「生産性がない」ともすれば思われがちですが、仕事と仕事との間の僅かな時間に、コーヒーを片手に何気なく交わした言葉がきっかけとなり、一冊の本が誕生することがしばしばあることを私たちは経験しています。

この紙面が様々な広がりを作る「雑談」の場として、カフェ的空間として、今後も存在意義を発揮できるようにしていきたいと思います。



うえき・けん(主任)

研究所活動 (2018年7月～11月)

キリスト教研究所1日研究会

開催日時: 2018年7月21日(土)15:00-

開催場所: 明治学院大学白金校舎本館92会議室

発表①

『順天時報』からみる中国キリスト教史

発表者: 土肥歩(客員研究員)

コメント: 石川照子(大妻女子大学教授)

発表②

「満州国における宗教統制」

発表者: 渡辺祐子(教養教育センター教授、所員)

コメント: 辻直人氏(和光大学教授、協力研究員)

懇親会

開催日時: 2018年7月21日(土)18:30-

開催場所: 鎮海楼

「アジアキリスト教史研究プロジェクト」主催研究会

「家庭教会の現状と課題

—宋軍牧師のパーソナル・ヒストリーから—

開催日時: 2018年9月13日(木)11:00-14:00

開催場所: 明治学院大学白金校舎キリスト教研究所

発表者: 宋軍氏(香港・中国神学研究院、中国文化研究センター主任。北京聖書教会〔家庭教会〕の前牧師)

「アジアキリスト教史研究プロジェクト」主催研究会

「アジアにおけるキリスト教—マレーシアにおける教会の歴史と現代の社会的役割」

開催日時: 2018年9月24日(月)11:00-15:00

開催場所: 明治学院大学白金校舎キリスト教研究所

マレーシア教会の歴史的背景と現状、そして今後の教会の役割について、マレーシア教会関係者の方々と自由に意見交換を行いました。

2018年度第2期 「アジア神学セミナー」

【2018年度テーマ】 アジアキリスト教史

【開講日】 毎週月曜日 18:25~20:25

【開講場所】 明治学院大学白金校舎 1558 教室

7/2 キリスト教「受容」のかたち2 植村正久論
(洪伊杓協力研究員)

7/9 キリスト教「受容」のかたち3 中国の知識人
(渡辺祐子所員)

10/8 宣教師と近代日本1 (大西晴樹所員)

10/15 宣教師と近代日本2 (辻直人協力研究員)

10/22 宣教師と近代中国 (渡辺祐子所員)

10/29 植民地支配下のキリスト教 満州国の場合
(渡辺祐子所員)

11/5 革命中国下のキリスト教 (松谷暁介協力研究員)

11/12 キリスト教から見る韓国の戦後史 (徐正敏所長)

11/19 現代社会とキリスト教1 身体性の回復
(植木献主任)

11/26 現代社会とキリスト教2 聖書をどう読むか
(永野茂洋所員)

新着図書

- ・『Japanese Religions』vol. 42 Nos. 1&2、NCC 宗教研究所、2018。
- ・『説教黙想 アレテイア』No. 102、日本基督教団出版局、2018。
- ・『福音と世界』No. 8、新教出版、2018。
- ・『福音と世界』No. 9、新教出版、2018。
- ・『福音と世界』No. 10、新教出版、2018。
- ・『福音と世界』No. 11、新教出版、2018。
- ・『キリスト教文化』2018 春号、かんよう出版、2018。
- ・『エイコーン』第48号、教友社、2018。
- ・『Reallexikon für Antike und Christentum Band 28』、ANTON HIERSEMANN、2018。

あんげろす ΑΓΓΕΛΟΣ

とは、「メッセンジャー」・「天使」の意。

あんげろす 第77号

2018年12月10日 発行
明治学院大学キリスト教研究所
〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37
TEL:03-5421-5210/FAX:03-5421-5214
Email:kiriken@chr.meijigakuin.ac.jp

題字：澁谷 浩